

【論文】

韓国の小学校英語教育から日本が学ぶべき視点

What Japan can learn from Elementary School English Education in Korea

辻 伸幸

2020年度から日本の小学校英語教育が高学年で教科化され、中学年で必修化される大きな改革が始動した。この変革に対して教育内容や指導方法の充実、ICTを含む教育環境の整備、教員研修、教員養成など課題は山積している。これらの課題に対し、解決に向かう糸口が韓国の小学校英語教育には存在する。日本に比べ20年以上も前に教科化に踏み切っているからである。社会・文化的な相違はあるが、私たちが参考にできることは多い。筆者は、2019年10月、金海市にある小学校の英語の授業を参観し、研究目的のため3本の授業を始めから終わりまでビデオ撮影する機会に恵まれた。また、実際に使われている教科書も入手した。本論文では、韓国の小学校における教科書と授業の事例を通して日本が学ぶべき視点を明らかにすることが目的である。

キーワード：小学校英語教育、韓国、日本

1 はじめに

韓国の英語教育において、英語運用能力の向上は、個人的にも国家的にも競争社会を生き抜くうえで必要不可欠なものとして日本以上に考えられている（Chung, Choi 2016、Widyastuti 2019）。これは、現在のグローバル化が進む世界で英語が共通語としての地位をもっており、貿易依存度が高い韓国にとって、英語運用力が経済力に直結しているからである。そのため、国民の英語教育熱はすさまじく、幼児から大学生まで英語の勉強に忙しく、保護者もまた自分たちの子どもにできる限り早期に英語教育に費用をかけ、英語運用力の向上に邁進しているのが実態である（Kim 2019）。

このような背景から、韓国の小学校において英語教育が教科化されたのは1997年と日本に比べ20年以上も前なのである。言い換えれば、韓国は日本の小学校英語教育の先達的存在であり、日本が学ぶべきことが大きいことは明らかである。

韓国の小学校英語教育は、教育制度、教育課程、母語や英語の使用状況、中国の漢字文化の影響、地理的な近さな

ど日本の背景と共通することが多く、今までにも多くの研究者による調査・研究がなされてきた（石川 2014、石川 2017、カレイラ松崎 2011、金 2007、金 2012、師子鹿 2009、杉浦 2007、杉山 2018、八田 2007、樋口 2008、李 2019）。

しかしながら、我が国では、現行の国家教育課程（2015改訂教育課程）下の韓国における小学校英語教育の現状を目的とした日本の研究者の調査・研究はされていない。日本と韓国の間にある政治的な意見の相違による交流の困難に起因しているのかもしれない。また、2020年から世界中を巻き込んでいる新型コロナウイルスのパンデミックによりお互いの国を調査・研究の目的で訪問することが不可能になったことも大きく関わっている。

筆者は、2019年の10月に韓国の小学校英語教育の現状を調査・研究するために金海市の小学校を訪問し、2校で英語科の3つの授業を参観することができた。これらの授業は、全て最初から最後までビデオ撮影をすることが許可され、詳細に内容を把握することが可能である。3つというサンプル数の少なさが課題ではあるが、授業の共通項を意識するだけでも、韓国の最新の英語教育の特徴を明らか

にすることができる。また、また参観した授業で使用していた教科書を入手することもできた。それらの事実から日本の小学校英語教育が学ぶべき視点を考察する。

2 韓国における小学校英語教育の変遷

韓国の小学校英語教育は、1980年代に「特別活動」の一環として4年生以上に「特活英語」として実施されたことから始まる。その後、1992年からは「裁量時間」の中の選択科目として英語が指導されていく。これらは、必修ではなくあくまでも、任意の領域的な扱いであった。

教科としての英語教育が導入されるきっかけとなったのが、金泳三政権の「世界化政策」の一つとしての「世界化推進のための外国語教育強化法案」(1995)であったと樋口(2008)は指摘している。金泳三政権は、その前の盧泰愚政権と共に長らく続いた軍事独裁政権から大変革をなした民主政権である。民主政権下では、民主化と経済発展が促進され、それを実現するための教育課程が公示され、第6次教育課程(教育課程は日本の学習指導要領に相当する)において各小学校の自由裁量のもとに5・6年生で英語教育導入へと進んでいったとバトラー後藤(2007)は述べている。さらに、小学校での英語を教科として正式に導入するため1995年からカリキュラム開発、教員研修、教科書開発、ICT環境の整備等を行っていたともバトラー後藤(2007)は述べている。

1997年に小学校3年生から英語が教科として年次進行で導入されていく。10種類以上の英語検定教科書の1つを使って週に2単位時間指導された。

2001年(第7次教育課程下)からは、他教科に授業の配当時間を譲る必要性から3・4年生は、週1単位時間に削減された。また、教材作成や補助教材に関連する予算の効率を図るため教科書は国定教科書の1種類となった。

第6次教育課程と第7次教育課程では、小学校に限らず英語教育全般に渡ってコミュニカティブ・ランゲッジ・ティーチングを基盤とする学習が重要視され、英語でコミュニケーションを取ることができることが目標とされた(Bok 2009)。

2010年には、韓国国民の英語教育熱が強まり教育格差が問題となり始めた。公教育でその格差解消を目指すため英語の授業は、3・4年生で週2単位時間に増え、教科書も10

種以上の検定教科書から選定する形式に戻った。2011年には、5・6年生で週3単位時間の指導の増加となった。

2019年時点の小学校英語教育は、2015改訂教育課程に則って3・4年生で週2単位時間、5・6年生で週3単位時間指導されている。

3 韓国における小学校英語教育の内容

3.1 2015改訂教育課程における小学校英語教育

2015改訂教育課程の目標では「小学校英語教育は、学習者が英語学習に興味と自信をもって日常生活で使う基礎的な英語を理解して表現する能力をつけ、コミュニケーションできる基礎を養う」とまとめている。その目標に続いて下位目標が次のように3つ示されている。

- ・学習に対する興味と自信を育てる。
- ・自分の周りの日常生活を基盤にする英語で基礎的なコミュニケーションができる。
- ・英語学習を通して外国の文化を理解する。(pp.5)

表1は、2015改訂教育課程英語科教育課程における小学校の内容(韓国教育部, 2015, pp.6-7)を示したものである。大きな特徴は、4技能(聞く、話す、読む、書く)において学年群の段階を考慮した系統的な学習内容を分かりやすく提示していることである。また、4技能における細かい形成要素を明示し、それぞれが言語使用上で働く機能も位置付けている。この概念・機能シラバスは、第6次教育課程から続いているコミュニカティブ・ランゲッジ・ティーチングを強く意識した結果と推察できる。

小学校における指導上の留意点は、以下の通りである。

- ・音声に重点を置き、文字は、音声と関連させて内容を構成する。
- ・小学生の特性を考慮して、実生活で接する活動など体験的な学習を行う。
- ・興味や関心を高めるためマルチメディアとICTなどの教育媒体を適切に使用する。
- ・未来の国際社会で成長していけるように多様な文化に対する基礎的な理解と寛容な態度を育成する。

表1 2015改訂教育課程英語科教育課程における小学校英語の内容（筆者翻訳）

			3~4年生	5~6年生	機能
聞く	音	音、強勢、リズム、抑揚を識別する	・アルファベット、単語の音、強勢、リズム、抑揚	・アルファベット、単語の音、強勢、リズム、抑揚	識別する
	語彙と文	単語、句、文を理解する	・単語、句、文	・単語、句、文	把握する
	詳細の情報	言葉や会話の詳細を理解する	周りの人々や物事	・周りの人々、物事 ・日常生活の関連トピック ・絵、図表	把握する
	中心の内容	話や会話の中心内容を理解する		・内容 ・目的	把握する 推論する
	脈略	話や会話の流れを理解する		・順序	把握する 推論する
話す	音	音に合わせて言う	・アルファベット、単語 ・強勢、リズム、イントネーション	・アルファベット、単語 ・強勢、リズム、イントネーション	模倣する
	語彙と文	単語や文を言う	・単語、句、文	・単語、句、文	模倣する 表現する 適用する
	談話	意味を伝達する	・自己紹介 ・指示、説明	・自己紹介 ・指示、説明 ・身の周りの人、物事 ・身の周りの位置、場所	説明する 表現する
		意味を交換する	・挨拶 ・日常生活に関するトピック	・挨拶 ・日常生活に関するトピック ・絵、図表、経験、計画	説明する 表現する
読む	スペル	音とスペルの関係を理解する	・アルファベット、大文字、小文字 ・単語の音、スペル	・アルファベット、大文字、小文字 ・単語の音、スペル ・強勢、リズム、イントネーション	識別する 適用する
	語彙と文	単語や文を理解する	・単語、句、文	・単語、句、文	把握する
	詳細の情報	文の詳細を理解する		・絵、図表 ・日常生活に関するトピック	把握する
	中心の内容	文の中心内容を理解する		・内容、目的	把握する 推論する
	脈略	文の論理的内容を理解する			把握する 推論する
	含意	文の含意を理解する			推論する

表1の続き 2015改訂教育課程英語科教育課程における小学校英語の内容(筆者翻訳)

書 く	スペル	アルファベットを 使う	・アルファベット、大文字、小文字	・アルファベット、大文字、小文 字	区別する 適用する
	語彙と文	単語や句を書く	・口頭で身に付けた単語や句 ・実物、映像	・口頭で身に付けた単語や句 ・実物、映像	模倣する 適用する
	文	文を書く		・句読点 ・口頭で身に付けた単語や句	表現する 適用する
	作文	状況や目的に合っ た文を書く		・招待、感謝、お礼の文章	表現する 識別する

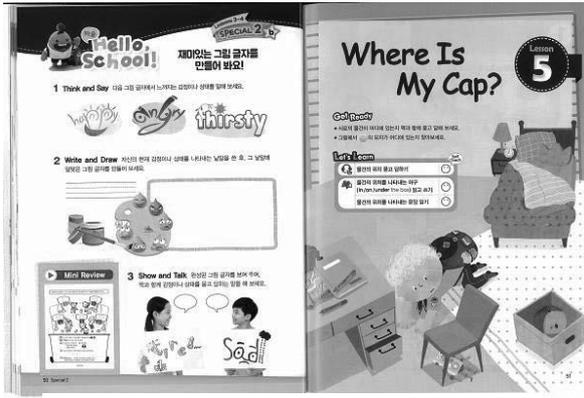


図1 韓国の小学校4年英語教科書5課の1

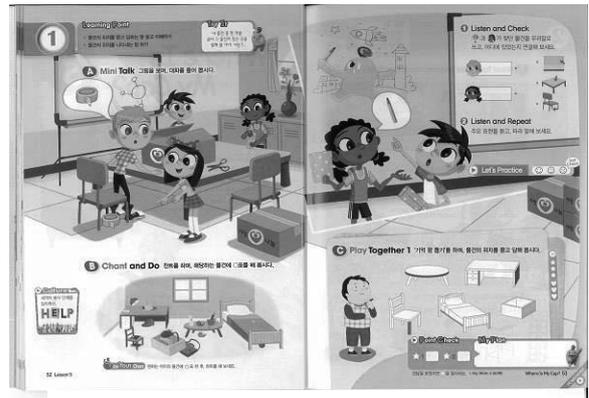


図2 韓国の小学校4年英語教科書5課の2

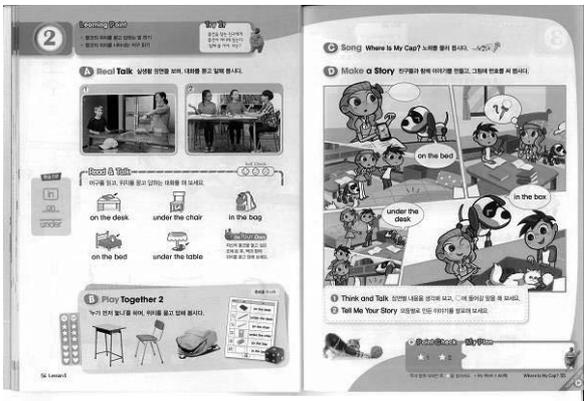


図3 韓国の小学校4年英語教科書5課の3

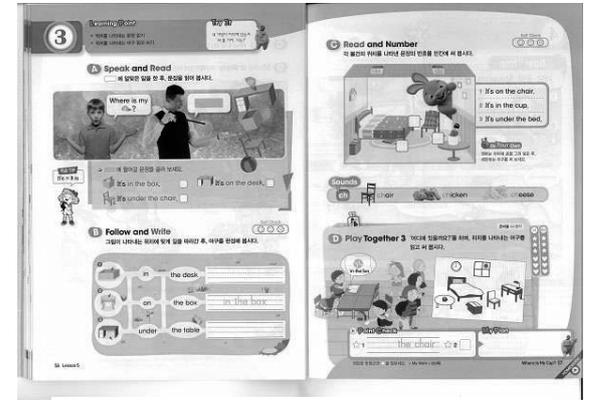


図4 韓国の小学校4年英語教科書5課の4



図5 韓国の小学校4年英語教科書5課の5

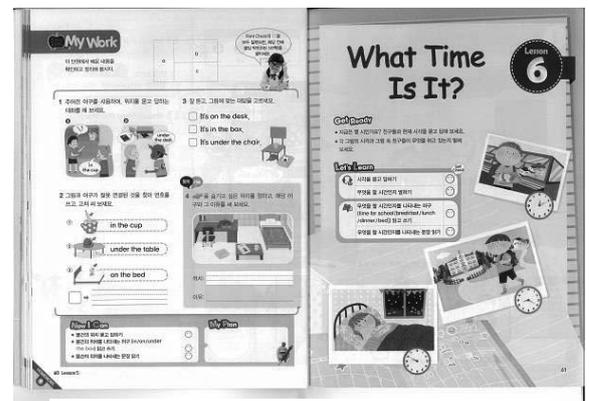


図6 韓国の小学校4年英語教科書5課の6

3.2 韓国小学校英語教育の教科書

現在、小学校英語教育の教科書は、検定教科書であり、10種類以上の出版社から出ている。その中でも、よく使われている教科書の一つである天才出版から出ている“Elementary School English”の4年生を具体的に取り上げて内容を整理する。この教科書は、筆者が授業を参観した金海市立合城初等学校（初等学校は日本の小学校に相当する）で使用されていたものである。

A4版の大きさで、児童が興味・関心をもつことができるカラフルな教科書である。教科書の学習活動の場面で登場するアニメキャラクターが設定されている。アニメキャラクターは、マスコットのJello、韓国の男の子のUju、女の子のBora、外国人のTina、Khan、Paul、Amy、Ericの8人が登場する。また、人物による実生活での英語使用場面をビデオクリップにして全課に入れている。そのビデオクリップに登場する人物も固定されていて、韓国の女の子のYuri、男の子のMinu、外国人のJenny、Kevin、Sallyが出てくる。

学習活動には、その課のキーセンテンスを基に聞くこと、話すこと、読むこと、書くことのすべてが含まれるが、聞くこと、話すことの活動が中心である。また、語彙や表現に慣れ親しむための歌、チャンツ、ゲームなども含まれている。教室のホワイトボードに投影して各活動のデジタルコンテンツを効果的に使用できるように整備されている。

1つの課は、全4時間で構成されており、それに付属して復習のページがある。

4年生は11の課がある。それぞれの課のキーセンテンスは、表2の通りである。

また、国際理解的なページも計5ページある。4年生では、世界の名前の表し方、世界の日常生活の常識、時差、職業、お金の数え方がテーマである。

表2 小学校4年英語教科書の各課のキーセンテンス

課	キーセンテンス
1	My name is Eric.
2	Let's play soccer.
3	I'm happy.
4	Don't run!
5	Where is my cap?
6	What time is it?
7	Is this your watch?
8	I'm a pilot.
9	What are you doing?
10	How much is it?
11	I get up early.

次に具体的に1つの課(Lesson5)を抽出して教科書の構成内容の特徴を整理する。

図1の右側が課の扉のページである。ここでは、キーセンテンス“Where is my cap?”が大きく示され、その下に、学習前の準備としてお互いに持っている物をペアでハンゲル語を使って聞き合い答えるように指示がある。また、扉の絵で男の子の帽子がどこにあるのか探すように指示している。さらに、この課で学ぶ内容として聞くこと、話すことでは「物がどの位置にあるか聞いて、答える。」、読むこと、書くことでは「物の位置を表す語句を読み、書く。」「物の位置を表す文を読む。」と記述されている。

図2は、第1時のページである。左上に本時の目標がLearning Pointとして明示されている。ここでは、「物の位置を質問して答える。」「物の位置について話す。」である。第1時の活動には、キーセンテンスを使うデジタルコンテンツ(Mini Talk)を聞く活動、チャンツで言われている物を絵から見つけてまるをつける活動、ゲーム「記憶の王様」を通して、物の位置を聞いて答える活動の3つが絵とハンゲル語で提示されている。

図3は、第2時のページである。本時の目標は、「物の位置を答える活動を行う。」「物の位置を表す語句を読む。」である。本時は5つの活動で構成されている。1つ目が、子どもがお母さんに自分の帽子を知らないか尋ね、テーブルの上にあることを教えてもらう実生活のデジタルコンテンツを見て、会話をリピートする活動。2つ目が、物の位置を示している絵を見て、語句を読んだり、位置を尋ねる会話をしたりする活動。3つ目が、さいころを使ったゲームを通して物の位置を質問して答える活動。4つ目が、“Where is my cap?”の歌。5つ目が、絵を見て友達と一緒にストーリーを作り、その順番を書く活動である。

また、ストーリーを考える活動では、キャラクターの台詞を考えたり、グループになってストーリーを創作したりすることが特徴である。

図4は、第3時のページである。本時の目標は、「物の位置を表す文を読む。」「物の位置を表す語句を読んで書く。」である。ここでは、4つの活動で構成されている。1つ目が、マジックの場面で、男の子が“Where is my cap?”と尋ねて、マジシャンが答える文を聞き取る活動である。2つ目が、絵と前置詞と名詞をマッチングさせて、正しい表現を線で結び、最終的にその語句を書く活動である。3つ目

が、位置を表す文と絵をマッチングさせる活動である。4つ目がどこにあるでしょうゲームを通して、位置を表す語句を読んで書く活動である。児童が今まで学んだことを基に考えながら読んだり、書いたりする活動へと移ってきていることが理解できる。音声に十分に触れてから読むことや書くことへと段階を踏んでいる。

図5は、第4時のページである。本時の目標は、「鞆工房のおじさんと妖精たちという役割劇をしながら学んだ表現を活用する。」である。ここでは、3つの活動で構成されている。1つ目は、絵を見て全体のストーリーを考える。また、文を読みながら吹き出しに入る台詞を言う活動である。2つ目が、鉛筆、さし、リボンがどこにあるのか言う活動と位置を表す英語の語句がどの場面に入るのか考える活動である。3つ目は、児童が実際に劇をする活動である。

最終的な言語活動がこの劇を英語で演じる活動と考えられる。この言語活動にたどり着くまでに、それまでの活動が段階的に、系統的に配置されていることが分かる。児童同士の評価表も掲載されており、英語の熟達度、演技力、協力の度合いの3観点が見られている。英語力以外に演技力や協力の度合いを含めているところに韓国の教育課程における目標の特徴を見ることができる。

図6の右側は、復習のページである。また復習の下側には、自己評価を行う箇所がある。Can-Do リストになっている。「物の位置を質問して答えることができる。」「物の位置を表す語句を読み、書くことができる。」「物の位置を表す文を読むことができる」が具体的な項目である。

教科書の示している目標に向けた活動が系統的に配置されている。さらに、教科書単体で 사용되는のではなく付属する教師用デジタルコンテンツと併用することが標準化されている。

4 韓国における小学校英語教育の授業

韓国の金海市立合城初等学校の4年生の授業、慶雲初等学校の3年生と5年生の授業を参観した。

まず授業の詳細に触れる前に、金海市と両校の概要を述べる。金海市は、慶尚南道に位置し釜山広域市と道庁所在地昌原市の間に位置する。2020年11月時点で人口54万人で、慶尚南道で2番目の規模である。小学校は、59校ある。教員は管理職を含めて2021名である。

合城初等学校は、金海市旧市街にあり、239名の小規模校である。外国人労働者の児童が多く在籍している。慶雲初等学校は、金海市北西郊外にあり全校児童608名の中規模校である。両校には、韓国人の英語専科教員と市が直接雇用しているネイティブスピーカーが配置されている。2020年度には、15名のネイティブスピーカーが雇用されている。前慶雲初等学校長の申相國氏は、「英語専科教員の充実によるためネイティブスピーカーの数は徐々に少なくなっている。」と述べた。

かつて韓国では、全小学校教員に対して120時間の英語教育の研修が義務づけられていたが、現在では、教員の個人的な状況に合わせて研修を受講するシステムに変化している。小学校教員採用選定時には、英語授業の模擬授業が課せられており、英語の授業を指導できることが一つの条件となっている。同時に、韓国では、英語専科教員の配置が進んでおり、金海市では、全小学校で英語専科教員が配置されている。

4.1 合城小等学校4年生の授業

この授業は、韓国人の英語専科教員一人での指導であった(図7)。20人の児童が授業に参加していた。なお、韓国の小学校の学級編成基準は、27人である。

この学校は、英語科専用の教室が配置されていた。教室前方中央にデジタルコンテンツを投影する電子黒板が設置されていた。また電子黒板の左右には、スライド式ホワイトボードがあり、学習の流れや本時で学ぶキーセンテンスが書かれていた。

Lesson 5“Where is my cap?”のパート2(図3)が本時であった。本時では、ウォームアップ、前時の語彙の復習、自作のデジタルコンテンツを使ったクイズ、教科書準拠

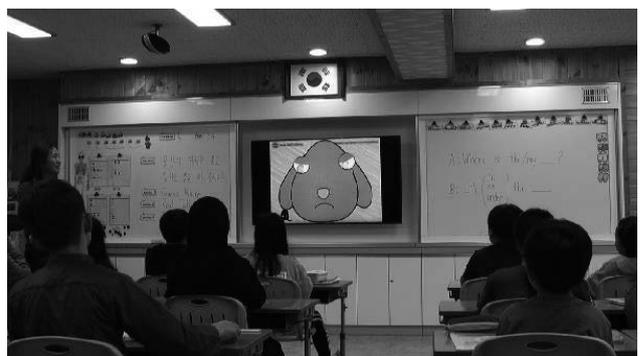


図7 合城小等学校4年生の授業

のデジタルコンテンツ、児童同士で今日のキーセンテンスを使ったゲーム、復習のデジタルコンテンツの6つがスムーズに流れた。

順に活動の中身について述べる。

①ウォームアップ

YouTubeで視聴可能であるアニメ動画を視聴した。アニメキャラクターの軽快な音楽に合わせて“On, In, Under?”と歌いながら繰り返し前時に学んだ語を復習できるものであった。

②前時の語彙の復習

自作のデジタルコンテンツの絵を使用して物の位置を表す表現に必要な語彙を指導していた。絵に合致する英語とハングル語の両方を答えさせていた。この復習の後、本時の学習活動の流れを確認していた。

③自作のデジタルコンテンツを使ったクイズ

自作のデジタルコンテンツのクイズ形式で絵が二つ登場する。例えば、最初に鞆の絵を出して教員が“Where is my bag?”と尋ね、児童は音声とジェスチャー両方で“ It's on/in/under the bed?”と予想して答え、正解の位置に鞆の絵が現れる。児童たちに人気のマリオが使われているコンテンツもあった。

④教科書準拠のデジタルコンテンツ

子どもがお母さんに自分の帽子を知らないか尋ね、テーブルの上にあることを教えてもらう実生活場面のデジタルコンテンツを見て、会話をリピートする活動を行なった。最初は視聴して会話の流れを理解させ、次に英語のキャプションを入れたものを流し、全員でリピートさせていた。

その後、児童を抽出し、会話の役割を決めてリピートさせていた。

いきなりリピートさせるのではなく、画像を使って児童と英語でやり取りをしながら活動に入っていたことにより、単調なドリルの練習の感じを受けなかった。

⑤児童同士で今日のキーセンテンスを使ったゲーム

子どもが、虫、鶏、サル、人間、王様と進化していくゲームを通してキーセンテンスを使うように工夫されていた。“Where is my cap?”と尋ね、“ It's on/in/under the bag?”とやり取りした後、じゃんけんをして進化していくルールであったが、英語を使う必然的な状況設定ではないことが課題であると筆者は考えた。

⑥復習のデジタルコンテンツ

今日学んだ表現が使われている“Where is the monkey?”(YouTubeで視聴可能)を見て授業が終わった。

授業の全般に渡って、教師はクラスルームイングリッシュを使うこともあるが母語であるハングル語を使用して説明することが多くあった。韓国でも英語を英語で教えるように進めてはいるが、母語の使用を制限していることはなかった。

4.2 慶雲小等学校5年生の授業

韓国人の英語専科教員とネイティブスピーカー教員の2人で指導するチームティーチングであった(図8)。主指導は英語専科教員で、ネイティブスピーカー教員は、日本のALT的な役割を担っていた。23人の児童が授業に参加していた。

この学校でも英語科専用の教室が配置されICT機器が整っていた。校長や教員へ尋ねたところ、韓国では、英語科専用の教室やICT機器が整備されているのが標準であることが分かった。

合城小学校で使用している教科書とは出版社が違うものを使用していた。Unit8の“What does she/he look like?”という単元であった。本時では、ウォームアップ、本時の表現の確認、教科書準拠のデジタルコンテンツ、グループに分かれて今日のキーセンテンスを使ったゲーム、まとめの5つがスムーズに流れた

順に活動の内容について述べる。



図8 慶雲小等学校5年生の授業

①ウォームアップ

チームティーチングで自作のデジタルコンテンツを使用して指導していた。ネイティブスピーカー教員が英語で説明した後、英語専科教員が全て、ハングル語で説明を補

っていた。子どもたちが知っている韓国の俳優、映画のキャラクター、金海市のマスコットなどの特徴を英語と画像で提示しながら、誰なのか考えるクイズであった。人物画像にモザイクを付けて、特徴的な箇所のみ見えるようにして本時に使用する表現に慣れ親しめるように工夫されていた。表現例では、“He has big eyes.” “ She has long hair.” などである。

②本時の表現の確認

“ When we see someone.”という条件設定を示し、“ What does she/he look like?”に呼応した“ She/He has long hair.”や“ She/He is wearing a hat.”などの表現を確認する活動であった。単語の語順を変えて、正しい文を確認できる自作のデジタルコンテンツを使用していた。英語の形式に重点を置き、ハングル語を使って英語専科教師が指導していた。

③教科書準拠のデジタルコンテンツ

ネイティブスピーカーが、デジタルコンテンツ（家族で遊園地に来て、子どもが迷子になり、その子の特徴を言って探し出すアニメ動画）を視聴した後、“ Where are the students?” “ Why was Emily late?” “ What does Emily look like?”と質問し児童が答えていた。英語専科教師がハングル語で支援しながら、答えに導いていた。質問は、個人ではなく全体に対してなされていた。続いて、英語のキャプションが入った動画を再生して、ポーズの箇所で文ごとに全体でリピートさせていた。それが終わると、歌“ What does she look like?”を聞いて表現に慣れ親しむ活動を行っていた。

④グループでのキーセンテンスを使ったゲーム

英語専科教師が、自作のプレゼンテーションソフトを使用してゲームの仕方を説明していた。プレゼンテーションのスライドでは、英語を載せているが、英語専科教師がハングル語で説明を行っていた。

ゲームは、3・4人のグループに分かれて、25の様々な人物が描かれたポスターを配り、各児童が人物を一人決め、“ What does she/he look like?” “ He has big eyes.”などとグループ間で情報をやり取りし、どの人物か当てるゲームであった。いわゆる情報ギャップを使ったゲーム活動の一種で、本時で慣れ親しんだ表現を使用するための必然性が高い活動であり優れた内容と考えることができる。

4.3 慶雲小等学校3年生の授業

女性の英語専科教師での指導であった（図9）。24人の児童が授業に参加していた。英語科専用の教室で授業が行われていたが、5年生の授業とは違う教室であった。Unit 8の“ I'm ten years old.”という単元であった。本時では、ウォームアップ、韓国教育番組の動画の視聴、教科書準拠のデジタルコンテンツ、今日のキーセンテンスを使ったゲームの4つがスムーズに流れた。



図9 慶雲小等学校3年生の授業

順に活動の内容について述べる。

① ウォームアップ

アメリカで児童英語教育用に作成されたデジタルコンテンツを使いながら教員と児童が身体表現と発音を同時にする活動であった。軽快な音楽とともに“ Hands up.” “ Hands down.”などの文字と動作がアニメで示され、手を上げたり、手を下ろしたりするものである。このような活動は、ジェームズ・アッシャーによって1960年代に提唱された全身反応教授法を応用したもので、外国語を学び始めた低学年や中学年の児童に対しては非常に適したものである。聞くことを中心とする活動であり、理解可能な英語のインプットを与え、動作化することで意味の理解を促進するものである。

②韓国教育番組のビデオコンテンツの視聴

英語教育に特化した韓国教育放送公社の専門局であるKorean Educational Broadcasting System English (EBS-e)のデジタルコンテンツを視聴した。登場人物が年齢を尋ねる場面を含むストーリーであった。

韓国は、小学校英語教育を支援するための条件整備に力を入れてきたことは特筆すべきことである。その中の一つにEBS-eがある。もともと、小学校間や児童による英語教

育格差の解消を目指して設立された(渡辺 2008)が、小学校教員が授業で使用することもできる。韓国内で使用されている5社の教科書に準拠したデジタルコンテンツが完備されており、教師、児童、保護者が使用できるようになっている。カレイラ松崎(2010)は、EBS-eのような豊富なデジタルコンテンツの整備に日本も着手すべきであると述べている。

③教科書準拠のデジタルコンテンツ

教科書準拠のデジタルコンテンツを見た後、教員が登場人物の年齢を英語で尋ね児童が答える活動を行った。その後、動画を文ごとに止めながらリピートする活動を行った。次に、別のデジタルコンテンツを視聴した後、その人物の年齢を教科書の絵に書き込む活動を行った。ややドリル的な活動となっていたが、教員が児童と英語によるやり取りをしながら取り組んでいたため、短時間であれば児童側のやらされている感が少なく英語嫌いを誘因することも少ないと推察できた。

④キーセンテンスを使ったゲーム

教員が作ったデジタルコンテンツを使って、英語で何歳かを考えるクイズであった。児童に人気のあるポケットモンスターのキャラクターを使用していた。

5 日本が学ぶべき視点

韓国の現在の小学校英語教育の現状を実際の授業や教科書の事例に焦点を当てただけでも日本と比べ教科化に踏み切って20年以上という英語教育の質の高さが明らかである。それらから小学校英語教育にとって、日本が学ぶべき三つの視点を考えてみる。

最初に、英語教育環境である。韓国の小学校英語教育は、優れたICT環境によって成り立っている。参観した授業で教科書に準拠したデジタルコンテンツや自作のデジタルコンテンツを効果的に使用できているからである。特に参考にできることは、教師にとって操作がしやすいICT環境の整備である。機材を授業ごとに接続するのではなく、デジタルコンテンツを瞬時に開き使うことができる環境である。そのためには、パソコン、プロジェクター、電子黒板等が常設されておりスイッチさえ入れれば、即、使えることのできる環境が必要である

日本でも文部科学省が提唱するGIGAスクール構想のた

めの予算がコロナ禍により早期執行され、児童生徒1人1台端末使用や学校ネットワーク環境の全校整備が進むであろうが、教員が使いやすい環境を構築することが求められている。また、英語教育のための専用教室の設置を進めるべきである。専用教室であれば前述したICT環境を常設して活用することが可能となる。また、児童にとってもその専用教室に入室することで英語を学ぶ意識を高くもつことも期待できる。

また、高学年では、2020年度から教科書の使用が始めたが、教科書に準拠した優れた数多くのデジタルコンテンツを整備することも重要である。そのためには教科書会社が安価で質の高いデジタルコンテンツを数多く開発する必要がある。

二つ目の視点は、教員である。長期的目標として小学校英語教育を指導するのは専科教員とし、それまでは、教科担任制などの工夫で乗り越えていくべきである。韓国では、教育力のある専科教員によって指導されているため授業での安定感がある。それに比べ、担任が指導することが多い日本は、研修体制も十分ではなく、児童が英語嫌いになってしまう危険すらある。

三つ目の視点は、教育内容・方法である。韓国の小学校英語教育では、優れた教育力をもった英語専科教員が、授業の最初から終わりまでICTを効果的に使用して指導している。ICTを使いながら児童の興味・関心を高め、英語の知識や技能を高めるような教育内容・方法の開発が日本も必要であろう。

また、ウォームアップを必ず入れ、英語の学びへとスムーズに誘い、最終的に授業の後半部で言語活動を児童が主体的に行える流れをつくることである。言語活動までは、ICTを有効に活用しながら教科書や自作の教材を使って語彙や表現を練習する活動を計画的、系統的に組み入れていく。このように定型化された授業は、授業に安定感をもたらしてくれる。日本でも英語教育に関わる全ての教師が獲得していきたい教育内容・方法である。

さらに、教科書の内容のみを扱うのではなく児童の実態に合わせて、教科書以外の教材を使えるようにすることは参考になる。特にデジタルコンテンツで作成した教材は、編集や保管の面で優れている。ICTを活用した教育方法も使えるようになれば、教員への負担も軽減されると考えられる。

参考文献

- 石川裕之 (2014) 「韓国における国家カリキュラムの革新とグローバル化」『教育学研究』81 巻2号 pp.214-226
- 石川裕之 (2017) 「韓国における国家カリキュラムと教育目的 — 初等教育段階に着目して —」『畿央大学紀要』14号(1) pp.19-26
- カレイラ松崎 (2010) 「韓国教育放送公社 EBS-e の小学生対象の番組分析」『メディア教育研究 東アジア研究』第7巻 第1号 pp.9-18
- カレイラ松崎 (2011) 「韓国の 2007 年改訂教育課程および日本の学習指導要領における英語教育の比較」『東アジア研究』第55号 pp.1-15
- 韓国教育部 (2015) 『英語科教育課程』 教育部告示第2015-74号[別冊14] pp.1-156
- 金泰勲 (2007). 「韓国の初等学校における英語教育の現状と課題」『日本大学教育学会紀要』Vol42 pp.75-94
- 金菊熙 (2012). 「韓国の英語公教育政策の現状-初等英語教育課程の推移と英語公教育強化政策内容を中心に-」『松山大学言語文化研究』32 巻(1-2) pp.259-284
- 師子鹿元美 (2009). 「韓国における早期英語教育韓 — 釜山広域市小中学校英語没入教育特別職務研修プログラムを通して —」『別府大学短期大学部紀要』No. 28 pp.71-80
- 杉浦正好 (2007) 「韓国の小学校では英語の授業がどう展開されているのか？」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第9号 pp.169-176
- 杉山明枝 (2018) 「公立小学校外国語活動導入の経緯とその進展の過程:副教材『英語ノート』から『Hi, friends』への流れを中心に」『大妻女子大学英語教育研究所紀要』第1号 pp.83-94.
- 八田玄二 (2007) 「韓国の小学校英語教育導入の経緯 — 日本の場合と比較して — 椋山女学園大学研究論集 38号 (人文科学篇) pp.13-22
- バトラー後藤裕子(2007)『日本の小学生英語を考える』三省堂
- 樋口健一郎 (2008) 「韓国初等英語教育政策の経緯と論点」河原俊昭 (編) 『小学生に英語を教えるとは』 pp.123-136 めこん
- 李恩珠 (2019). 「韓国における公立小学校英語教育」 早稲田大学教育総合研究所 (監修). 『東アジア地域における小学校英語教育』 pp.12-23 学文社.
- 渡辺誓司 (2008) 「放送・メディアが小学校英語を豊かにする～韓国の事例から～」『放送研究と調査』6月号 pp.56-65
- Chang, B. M. (2009). “Korea's English Education Policy Innovations to Lead the Nation into the Globalized World”, *Pan-Pacific Association of Applied Linguistics* 13(1) pp.83-97
- Chung, J.; Choi T. (2016) “English Education Policies in South Korea: Planned and Enacted”, *English Language Education Policy in Asia. Language Policy*, vol 11. Springer pp. 1-23
- Kim, S.Y. (2008) “Five Years of Teaching English through English: Responses from Teachers and Prospects for Learners”, *English Teaching*, Vol 63 No.1 pp.51-70
- Widyastui, A. (2019) “Language Policy and Planning English Language Education Policy in Indonesia and South Korea”, *Post Graduated Program Faculty of Teacher Training and Education Mulawarman University Samarinda* pp. 1-32

謝辞

本研究において韓国語文献の翻訳の校正をしていただいたり、韓国小学校の英語授業を視察するために金海市立慶雲初等学校校長の申相國氏に繋いでいただいたりした在日本大韓国民団和歌山地方本部の申雨澈氏と金知子氏に心より感謝の意を表します。また、授業観察をさせていただいた金海市立慶雲初等学校と金海市立合城初等学校の両校長先生はじめ、お世話になった先生方にも心より感謝の意を表します。